



論文概要書

批判実践としてのエスノメソドロジー

山田 富秋

はじめに

本論文は、ガーフィンケル(H.Garfinkel)の創始したエスノメソドロジー(ethnomethodology)という社会学の一学派を「権力作用」のフィールドワークの戦略として位置づけ直すことを目的とする。エスノメソドロジーの研究プログラムとは、私たちがある文化のメンバーとして、日常的な協働的相互行為を通して、文化の内部から絶え間なく「共通に知られているものとしての」社会を確認し、再生産している方法・様子を記述するというものである。このメンバーの方法こそエスノメソッド(ethnomethods)である。

これまでの社会学との根本的なちがいがここに表現されている。まず私たちはある主観的意図を持った行為者であるというより、メンバーである。つまり、私たちは個人として行為する以前に必ずある文化のなかに生まれ、その文化の一人のメンバー(成員)として、他のメンバーが社会を見るのと同じように「適切に」社会を見ることが出来るコンピタンスを持っている。たとえばルーティンな日常事の進行に対していちいち文句をつける人は「よそ者」か、あるいは適切なメンバーとしての成員資格を疑われることになる。

ここからもう一つ重要なことが帰結する。それは、私たちのこの世界の見方は徹頭徹尾何らかの道徳性や規範性に貫かれているということである。ガーフィンケルが強調するように、この社会で生活することには、当該社会で自明視された道徳性に忠実に従うこと自体が前提になっている。ガーフィンケルはこの「誠実な成員, bona-fide-member」の道徳性に対する忠誠を「部族的忠誠, tribal allegiance」と皮肉っている。

ガーフィンケルの問いかけがラディカルなのは、まさにここにおいてである。もし社会秩序をデュルケームのように実体化して考えるなら、道徳的秩序は第一の社会的事実になってしまうだろう。しかしながら、道徳的秩序は社会的事実として存在するのではない。むしろ、私たちが『社会における歴然たる当たり前の事実』を把握しそれに承服するから、道徳的秩序が「事実」として成立するのである。それは私たちが自発的に「行為の責任」をまっとうする「誠実な成員」とどまり、当該社会の自明視された道徳的秩序に「部族的忠誠」を誓うから、成り立っている現象なのである。

しかしながら、これは奇妙な逆転現象と言うこともできる。なぜなら、社会秩序は私たちが協働で作り上げたもののなのに、私たちはそれを実体化し、それに従

属してしまうのである。ここにマルクスの概念に類似した一つの「物象化」のメカニズムを読みとることもできよう。そしてガーフィンケルはこうした「物象化」による疎外現象を「判断力喪失者」(judgmental dope)の状態と呼ぶ。彼によれば、社会学者や心理学者は単純な理論によって、人間をよく「判断力喪失者」に仕立て上げるといふ。つまり人間は社会を協働で構築するコンピタントなメンバーであるにもかかわらず、心理学や社会学の単純化された理論は、欲求や社会構造に拘束され、それに従順に従う人間像を生み出すのである。しかし興味深い点は、ガーフィンケルが日常生活者もその例外ではないと断言するところにある。つまり、日常生活者もまた自明視された常識に従うことによって、自らを常識の支配下に置いてしまうのである。これこそエスノメソドロロジーの着目する権力現象である。以上の問題提起から本論文は始まる。

権力作用としての道徳的秩序

第一部では、エスノメソドロロジーを権力作用の批判実践として組み立て直すために必要な理論的準備作業を行う。まず第一章において、エスノメソドロロジーが生まれた時代背景を素描しながら、ガーフィンケルがエスノメソドロロジーを生み出した当初から権力現象に着目していたことを歴史的に例証する。彼はエスノメソドロロジーを構想する以前に「カラートラブル」という小説を書いていた。そこには 1950 年代において黒人を差別するジム・クロウ法の実態の一部が描かれている。それはガーフィンケルが実際に目撃したと思われるバスの席をめぐる差別の現場である。ニューヨークからきた黒人の若者たちが、バスの後部座席に座らずに、白人専用とされる中程の席に座ったことから事件は起こる。バスの運転手とのちょっとしたいざこざのあと、警官が二人を逮捕するのである。

この事件について下される一般的な評価は、過去の黒人差別の実態を記録したことだとされるかもしれない。しかしガーフィンケルの着眼点は、それとは少しちがっている。彼はこの事件を「知覚の衝突」として特徴づけるのである。つまり、この事件を単純な政治的利害の衝突というより、異なる準拠枠にしたがって異なった現象が「知覚」されるようになる「知覚の衝突」として捉えたのである。同じ現象に見えることは、知覚が違えば、違う現象になる。そして白人というマジョリティの「自然な」知覚は、黒人の知覚を否定する。ここには対立する複数の知覚が存在し、しかもある知覚に従って行動することが、逮捕されたり、暴行を受ける結果を招くものとして考えられている。

それではエスノメソドロロジー的に考えれば、ここで働く暴力とはどのような社会的力なのだろうか？ 私たちがある文化のメンバーとして「自然な」世界を認知するとしたら、ここに描かれている事件は、自然な自明性が暴力に転化する事

態である。つまり、日常世界の自明性が他の「知覚」を暴力的に排除している。したがって、この社会的力を自明性を土台として働く「権力」現象として捉えることができるだろう。

ところが、こうして考えられた「権力」現象は従来の権力現象とかなり異なったものであることがわかる。たとえば、従来の権力概念は、一方には行為者を想定し、他方に行為を水路づける社会構造を想定していた。このモデルに基づいた「権力」現象は（１）個人の利害を他者の反対を押さえて実現する主意主義的なモデルと、（２）社会構造や制度による個人の支配という構造的モデルの二極化した権力現象しか論理的に帰結しないことになる。しかしながら、ここで問題にしている権力は、そのどちらでもない。むしろ、メンバーが絶えず協働で産出しているにもかかわらず、それが自明であるために、「自然な社会」として転倒して構築され、その結果、メンバーに対して道徳的拘束力を及ぼす「権力」である。さらにまた、メンバーが自明視された実践的推論を協働で遂行することによって、自らもその権力の編成にその場その場で巻き込まれていく「微細な権力」である。

このような権力現象を中心的テーマにしてきたのは、言うまでもなくミッシェル・フーコーである。フーコーによれば権力の行使は暴力ではなく、むしろ「行為の可能性を導き、その結果生じる出来事を整序する」「統制 (gouvernement)」である。こうしたフーコーの権力概念を従来のそれと区別するために「権力作用 (power effects)」と呼ぼう。

エスノメソドロジーの立場から以上のことを言い直してみよう。ある文化コミュニティのメンバーは、状況を何らかの形で認知する能力をもった時点で、すでに社会構造の刻印を帯びている。メンバーは自己の主体性の形式（アイデンティティ）を選び取らされるだけでなく、他者との社会関係の形式や、状況の構造化も文化によって型どりされる。しかもこれは文化に浸透した認知＝判断作業をメンバーが積極的に協働で行うことによって、つまり実践的推論のプラクシスを通して、その場その場で達成されていく。フーコーが指摘したように、メンバーの協働による微細な権力の編成という視点からすれば、全体化＝構造化の方向も、個体化の方向も同一の運動の二つの局面である。

これまでの議論をまとめるなら、エスノメソドロジーの問題とする権力現象とは「権力作用」の現象であり、私たちの日常世界が自明視されているということこそ、権力作用の働く土台に他ならないだろう。そうだとしたら、私たちは「常識」の拘束力に抗いながら、常識自体を複雑な権力作用の交差する場所として捉え直さなければならないだろう。ここで立てられる研究方針とは、メンバーの認知や推論を同一方向へ導いていくような微細な言説編成を明らかにすることである。それは「日常性批判」を目指す批判的エスノメソドロジー（critical ethnomethodology）の実践である。

この「日常性批判」という文脈に沿いながら、第二章ではエスノメソドロジーの直接の知的源泉であるシュッツを位置づけなおそう。ここでは有名なパーソンズとシュッツの論争から出発する。パーソンズによれば、合理的行為を行う科学者こそ現実の人間を評価するモデルになるという。なぜなら行為者もまた「状況についてより広範な知識をもつ」観察者（科学者）の期待に、自らの現実の進路を同調させるからであるという。これに対してシュッツは、まったく反対の意見を唱えた。すなわち、パーソンズの提唱する「厳密な意味での合理性」は、社会的世界の内部にある行為者の心のカテゴリーではないため、本来的に理論的な観察のレベルでのみ妥当する。それどころか「私が強調したいことはただ、合理性の理念は、日常的思考の特徴ではないし、またありえない。従ってそれは日常生活における人間行為を解釈する上での方法論的原理たりえない、ということである」とまで主張する。

一見奇抜な考えに見えるこの主張は、彼の「多元的現実論」から導かれた結論である。シュッツによれば、科学的世界、より正確に言えば、科学的理論構成の世界は、至高現実である日常的活動の世界とまったく異なっている。それは日常世界とは違うレリヴァンス・システムに支配された別の「限定された意味領域」である。そして個々の「限定された意味領域」を相互に変換したり共約する公式は存在せず、私たちは一つの意味領域から他の意味領域へと存在論的に「跳躍」しなければならない。このことを科学的世界と日常世界に限って言い換えれば、私たちは科学的理論構成の世界で行われている活動をダイレクトに日常世界に持ち込むことはできないということである。したがって、パーソンズの採用する合理的人間モデルは、現実の人間の行為を評価する基準にはなりえないのである。

だがここで注意すべきは、シュッツの多元的現実論が超越論的現象学の残滓を引きずったきわめて独我論的な立場から論じられていることである。つまり孤我の領域である科学的世界とコミュニケーションの世界である日常世界をつなぐのは意識の流れなのである。ところが、シュッツの「よそもの論」における「よそもの」の描写は、多元的現実論の前に書かれた論文であるにもかかわらず、独我論の問題性を突破しているように見えるのである。つまり、多元的現実論ではいまだに超越論的自我による現実構成が前面にでているのに対して、よそもの論ではもはや孤我の意識活動ではなく、生活世界における具体的な相互行為こそ中心的なものとして扱われている。この変化は多元的現実を認識論的に捉える視点から、身体を通じた実践的なコミュニケーションの現実として捉える視点への転換と考えられる。

なぜなら、他の集団へと自らの身体を持って入り込んでいった「よそもの」が体験したように、生活世界に投錨点を持つためには、身体を通して以外に道はないからだ。そして、よそものが現実との接点をもったのは、孤独な「科学者」のように他者の応答が不在である「単なる想像のレベル」を捨てて、他者を具体的な応答の返ってくる相手として、身体を通して実践的に行動することによってである。シュッツはこの変化を「受動的理解」から「能動的理解」への転換と呼んでいる。そして受動的理解は実践的環境に身を置くことで、役に立たないことが証明されてしまう。これまでの議論をまとめれば、間主観的なワーキングの世界と比較すれば、科学的世界は現実と接点をもたない、仮想的でモノローグ的な現実にはすぎないということにならないだろうか。

同様に、ガーフィンケルは超越論的自我、あるいは孤我の意識による現実構成を社会的な現実構成へとラディカルに転換した。つまりガーフィンケルによれば、多元的現実の各々を構成していたエポケーは孤我の意識の操作ではまったくない。むしろそれは、ある文化コミュニティで通用している類型化＝レリヴァンス・システムである。シュッツによれば、日常生活世界はさまざまなレリヴァンス・システムからなる。このレリヴァンス・システムは、特定状況の利害関心に依存している。つまり同一の対象がレリヴァントかどうか、つまり類型化されるかどうかは、当の行為者の利害関心である手許の問題に関わっている。しかしガーフィンケルによれば、それは個人的な恣意にまかされているのではなく、むしろ、内集団によって社会的に承認されているのである。そして類型化とはそもそも外的対象に社会的意味を付与する操作であるから、内集団の成員であれば誰でも知っている「常識」を背景として、ある対象の外観と、その対象について社会的に意図された意味とを一致させていく社会的判断規則なのである。

ここからガーフィンケルの有名な「違背実験」が生まれてくる。よそものの接触集団に対する知識がまったく無効であったように、「あなたのどのへんが今日、調子いいのですか？」というふうに、使用される表現を厳密なものにするといった、日常世界において科学的態度の構成要素の一つを実践すると「人の行為の環境の無意味さを増幅させ、相互行為システムをますますばらばらにする」ことになってしまうのである。

このようにシュッツを再解釈していくと、第三章で見るように現在のガーフィンケル自身の立場も批判せざるをえなくなる。それは彼の最近の「独特（ユニーク）な様式への適合性要件」や「個性原理」を記述する方針である。なぜならこの方針は「この私」が会おう「この現象」の一回性というユニークさをそのまま取り出そうとしながら、実際にはその趣旨を裏切って、「個性原理」の一般的記述という脱身体化され脱文脈化された記述にとどまってしまう危険性を持っているからだ。そしてこの方針はシュッツの言う「受動的認識」に位置する点で、ガ

ーフインケルの批判するパーソンズの理論と同じ位相に属することになる。それは現象のユニークさを消し去り、そこに何でも代入することができる一般化可能な装置やメンバーの方法を抽出する研究になる。この研究から、啓蒙主義的な「理性」や「真理」に類似した言説が生み出されるだろう。ところが皮肉なことに、この研究はコミュニケーションがいつでもどこでも可能だという、いわばコミュニケーションの普遍性に依拠することで、シュッツが「よそのもの」論で描いた「他者」を消去する政治的実践に加担する危険性と隣り合わせなのである。

「権力作用」のフィールドワークの戦略

こうして「批判＝クリティーク」としてのエスノメソドロジーをシュッツから準備したあとで、第二部においては、現象学と並んでエスノメソドロジーに大きな影響力を与えているウィトゲンシュタインの言語哲学を、フーコーの権力論を踏まえた批判実践に組み込んだ。第四章において、エスノメソドロジーにおけるエスノグラフィックな研究をレビューし、ポルナーの批判する「内生的リフレクシヴィティ」を超えていく繊細なフィールドワークの方向性を提示した。ポルナーによれば、エスノメソドロジーは近年の展開の過程で、初期のラディカルな「リフレクシヴィティ」(reflexivity:相互反映性)を失ったという。彼によれば、二つのリフレクシヴィティが存在する。第一は「内生的リフレクシヴィティ」(endogenous reflexivity)であり、それは「ある社会的現実の内部で、その現実に対して、また、それについてメンバーが行っていることが、どのようにして当の社会的現実を構成しているか」ということを示す。つまり、「当該の状況についてのメンバーの“知識”や記述が“再び前に戻ってきて”その状況を組織する一構成要素として編入される」という事態がリフレクシヴィティである。

この「内生的リフレクシヴィティ」に対して、ポルナーはエスノメソドロジーの成立当初から存在していたもう一つのリフレクシヴィティとして「自己言及的(referential)リフレクシヴィティ」あるいは「ラディカル・リフレクシヴィティ」を挙げる。それは「エスノメソドロジーも含めた、およそあらゆる分析もまた一つの構成過程にあるものとして捉える」ことである。つまり、分析者であるエスノメソドロジストもまた「内生的リフレクシヴィティ」のプロセスから免れることはできない。エスノメソドロジストもまた、ある状況の内部から状況を解釈することによって、それを「説明可能なもの」にしていく作業に巻き込まれているのである。

前者の内生的リフレクシヴィティの研究は、調査者自身を超越論的な場所に隠してしまい、あたかも当該状況におけるメンバー自身のカテゴリー化実践自体をそのまま取り出せるような幻想を与える。つまり、データとしてのメンバーの実

践は調査者とは独立して存在するというわけだ。これは確かに社会的現実とは行為者たちの相互行為を通して作られるという構築主義的前提に立っているにせよ、調査者自身をそこから除外している点で、オーソドックスな実証主義的調査法とさほど変わらない。これに対して、ラディカル・リフレクシヴィティから導かれる研究方針は、データは調査者の調査行為から独立したものではなく、むしろそれと不可分なものであり、調査のプロセスを通して現実が作り出されるというものである。

ポルナーの問題提起を受けて、第五章においては「批判実践」としてのフィールドワークとはどんなものなのか、私の精神病院のフィールドワークを材料として、シルバーマンたちの「ポスト啓蒙主義」を参考にしながら描き出した。これは、調査者である私の研究プロセスそれ自体を自己言及的に批判しながら、一見固定しているかに見える常識の支配という状況を、フーコーとウィトゲンシュタインとエスノメソドロジーをつなぐ道筋を通して解体する試みである。つぎに待ち受けている作業はフーコーの言説編成とクルターの「論理文法分析」を結びつけることによって、より繊細なフィールドワークを準備することである。これは第六章においてマッコールとリンチたちの論争を整理することで示した。それはリンチの論理文法分析を全面的に否定することではなく、むしろ彼の微細な分析が、フーコーの示唆した言説編成の権力作用分析に大きく貢献することを論証したことである。こうして第三部において具体的な分析をする準備が整った。

「権力作用」分析としての制度的文脈の会話分析

第三部においては、近年盛んになってきた「制度的文脈の会話分析」を権力作用の分析として鍛え直す必要性を説明したあとで、司法場面と医療場面の分析を提示した。最初に第七章においては、制度的文脈の会話分析の一例としてニューズインタビューを取り上げた。ここでは、日常会話における「ニュース」の提示の会話特徴と、制度的文脈におけるテレビニュースのそれが、非常にはっきりと異なっていることを、具体例に即して示した。重要な点は会話分析から生まれたこの新しい方向性は、「権力作用」についての繊細であると同時に多元的なフィールドワークとして展開できることである。つまり、この新しい方向性は「内生的分析」に甘んじることなく、積極的に他の論理文法の働く会話の場所を比較することによって、「ラディカル・リフレクシヴィティ」の実践として、現在の考察対象である会話現象を批判する地点を確保することができるのである。

続く第八章と第九章では、それぞれ家庭裁判所調査官面接と精神科の診断場面とを、権力作用のフィールドワークの一例として呈示した。いずれの場面でも、そこで働いているコミュニケーションの自明性を解体するために、それとは異な

った場面と当該場面を対比させ、異質な「論理文法」の同時存在を示すことによって、自明視された日常性の権力作用を批判するという手続きを取っている。前者においては、申立人との面接と相手方との面接を比較することによって、理念化された「法的」言説と実際の面接とを対比して示した。後者においては、精神科の診断場面を、私のフィールドノートに記録された「妄想を語る」場面と対比させた。こうした「対比」ないし「対立」の方法こそ、エスノメソドロジーを閉じた分析（「内生的分析」）から解放するものである。

まとめ

本論文全体を通して私が呈示したいことは、コミュニケーションの同質性を前提にしたエスノメソドロジーではなく、コミュニケーションの不可能性から出発するエスノメソドロジーである。それはメンバーにとってのアカウンタビリティ（説明可能性）を問題にするのではなく、アカウンタビリティ自体が隠蔽し排除している「他者」を問題にする。それをラディカル・アカウンタビリティと呼んでもいい。これは常識を当該状況においてポリティカルに批判する道具としてエスノメソドロジーを位置づけなおすことである。繊細なフィールドワークに基づく「日常性批判」が、私たちの最初の問題提起から再構築されたエスノメソドロジーである。

私がこの論文で行ったことは、大きく二点ある。ひとつは現在オーソドックスなエスノメソドロジーと見なされている「ポスト分析社会学」を「内生的分析」として退け、エスノメソドロジーが成立当初から持っていた批判（クリティーク）のモメントを復活させたことである。この課題にはシュッツの「身体論」的な読み替えと、コミュニケーションの不可能性の呈示が必要だった。もうひとつは、エスノメソドロジーを日常性批判のための細かなフィールドワークの道具として位置づけたことである。この仕事のためには、制度的文脈の会話分析をフーコーの言説編成と結びつけ、ウィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーの「論理文法分析」を「権力作用」の分析に結びつけることが必要だった。そして最後の二章はその具体的な研究例である。

本論文においては具体的分析例がまだまだ足りないところもあるが、エスノメソドロジーのひとつの豊穡な可能性をもった方向について、具体性をもって示すことができたことを一つの収穫としたい。

（約 10,200 字）